

文末の「かしら」と非文末の「かしら」 —性差表示の出現位置をめぐる一考察—

任 利

キーワード：「かしら」、性差表示、文末表現、終助詞、対話ストラテジー

要 旨

本稿は文末の「かしら」と非文末の「かしら」の使用を実例に即して考察し、現代日本語における性差の出現位置という問題を検討した。文末に用いられる「かしら」は、使用者が女性であることを積極的にマークする女性性の強い性差表示である。一方、文末以外いわゆる非文末に用いられる「かしら」は、不定指示という副詞的な働きをし、性差との関連が薄く、使用者の性差指示にならない。文中の位置・機能により性差表示に違いが出るというこの言語現象は、日本語の根本的なメカニズムと繋がっていると考える。即ち、現代日本語における性差表示は、言葉の対人的機能を重視する待遇表現と同様、文末表現において最も顕著に担われる、非文末表現は必ずしも性差表示を担わない、という一般的な性質の現れであると考えられる。

1. はじめに

現代日本語の助詞「かしら」は、普通、終助詞に分類されている^{*1}。ところが、以下の(1)のように、文中に用いられる「かしら」の使用例が見られる^{*2}。

(1)夏の朝のメロン畑に立っているような匂いだった。その匂いは私を何かしら

*1 例えば、『日本語教育事典』(p.414)、『日本文法大辞典』(p.105)、『日本文法講座 6 日本文法辞典』(p.47)、『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』(p.27)などでは、助詞「かしら」が「終助詞」に分類される。

*2(1)のような「かしら」が「副助詞」に分類される場合もある。例えば、『明鏡国語辞典』(p.305)、『日本国語大辞典』(第二版 p.620)、『日本語文法大辞典』(p.142)、『大辞林』(第二版 p.471)など。本稿では、品詞分類に立ち入らないことにする。

不思議な気持ちにさせた。(『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』より)

(1)のような文末以外に用いられる(以下非文末^{*3}と呼ぶ)「かしら」は、以下の(2)のような文末に用いられる終助詞「かしら」とは、相互に無関係のものではなく、もともと一語から発達してきたものであり、本来内面的に連続的であるものと思われる。ただし、文中の位置により担う機能が異なっていると考えられる。

(2) 73, わたしもアデランスしようかしら。

74, うん。

75, うんとかいってんの。

76, 盛り上がっちゃったよー。(『女性のことば・職場編』より)

また、上記 2 例の典型的な使用者をイメージすると、(2)の文末の終助詞「かしら」の文には、(1)の非文末に用いられる「かしら」の文に見られない、特定の性別を連想させるところがある。つまり、(2)の使用者としては、普通ならば女性であるというイメージを喚起させる。

性差表示という点に関して、なぜ、(1)と(2)に伴うイメージ的な違いが存在するのだろうか。本稿は、文末の「かしら」と非文末の「かしら」の実例を、特に性差表示機能の有無という観点から検討し、現代日本語における性差表示の出現位置について考察しようと試みるものである。

2. 助詞「かしら」の語史

具体的な調査に先立って、まず助詞「かしら」の語史を概観し、その本来の意味と機能を確認しておく。

よく知られているように、現代語の助詞「かしら」は「かしらぬ>かしらん>かしら」という変化をたどってきた。その歴史的変遷については、村上(1981)、山口

*3 本稿で非文末の「かしら」というのは、いわゆる間投助詞「な」、「ね」、「さ」などに似ていて、文中の語句の切れ目で用いる場合を指す。ただし、「な」、「ね」、「さ」などと違うのは、「かしら」の場合は「なに」、「だれ」、「どこ」などの疑問詞の後につくという制約がある。

(1990)、佐々木(1993)、堀崎(1995)、矢島(1996)、任(2003)などの研究により明らかになっている。即ち、「疑問表現+しらぬ」という構文をもとに発達して、文末の「しらぬ>しらん」が疑問助詞の「か」と一体になり、「かしらぬ>かしらん>かしら」というプロセスを経て、「かしら」という形の文末表現に定着してきたのである。

「かしら」の原型と思われる形式「かしらぬ」は、中世末期の口語を基本的に反映されているとされる狂言台本虎明本(1642年)から見出される。例えば、

(3) 「あいつめにくひつかふかしらぬ」 (虎明本狂言・いなばだう)*4

近世江戸語資料には、文末に「かしらぬ」と「かしらん」が並行して使用されている様子が見られ、「かしら」の用例は稀である*5。例えば、

(4) 「ハテいきだなけふはゐやうかしら」
(洒落本・婦美車紫野(1774年)『洒落本大成』第6巻p.160)

明治後期から大正期にかけては、「かしらん>かしら」の語形成の大きな転換期と見え、昭和前期頃になると、語形が完全に「かしら」に定着したと見られる*6。

非文末の「かしら」も恐らく同じ経路をたどり定着したのであろう。ただし、非文末の「かしら」はいつ頃から「かしらん」から「ん」が脱落して「かしら」になったのか、そしていつ頃になって完全に「かしら」に定着したのか、まだはっきりしていないようである。

堀崎(1995)は、江戸後期の文化・文政期以降、次の(5)のような文中の「かしらん」の用例が見られるようになった、と指摘している。

*4 村上(1981)p.1036。

*5 堀崎(1995)は近世江戸語資料では文末の「かしら」の用例は上記(4)と以下の『江戸語大辞典』の用例を含め、4例しか見られなかったと指摘している(p.10)。

例、「そんなら言ほうかしら」洒落本・廻覧奇談深淵情(1779年)

(前田勇編『江戸語大辞典』p.248『洒落本大成』第8巻p.138)

*6 近代から現代にかけての「かしらん>かしら」の歴史的推移に関しては、詳しくは任(2003)を参照されたい。

- (5) 毎日 商 からの帰りに^{けへ}はの、何かしら^{なに}ン竹^{たけ}の皮^{かわ}へ買^{かっ}て来^きての、サアか、さん
一つあがれと
(滑稽本・浮世風呂(1809-13年))

そして、(5)の「かしらん」は文末辞としての性質が弱まり、文中で不定を表す「か」「やら」と近いものになった、と指摘している*7。

また、江戸後期の滑稽本『花暦八笑人』では、以下のように文中に用いられる「かしら」の用例が見られる。

- (6) 「ヘンそれだから人を破家^{ばか}に計りしなさんなよ。何かしら^{なに}ちつとは能^{のう}の有る物だ」
(滑稽本・花暦八笑人初編二の巻(1820-49年)『滑稽本集』p.769)

(6)が非文末の「かしら」の初出例だとすれば、江戸後期頃になると、非文末も文末とほぼ同時に、「かしら」という形に収斂していく様子が見られるのではないかと考えられる。それを確かめるために、幕末・明治前期あたりの使用状況をより詳しく調査すべきであろうと思われるが、別稿に委ねたい。

「かしらぬ>かしらん>かしら」という語形変遷は、助詞「かしら」の本来の意味と直接に結びつくと思われる。つまり、「……か」という疑問文が表す疑問について、自らその答えを「しらない」ということを示すわけである。独り言のような、聞き手を想定しない対自的な場面に使用される「自問」を表すのが、助詞「かしら」の本来の意味である。文末の「かしら」も非文末の「かしら」も本来は同じく「自問」を表すものから出発してきたものであるといえよう。

「かしらん>かしら」という語形変遷の過程において、新形式である「かしら」には、また使用者が女性であるというニュアンスが加わる。つまり、終助詞「かしら」の使用には性差が形成されて、終助詞「かしら」は、使用者が女性であることを積極的にマークする女性性の強い性差表示と認識されてきた。それは、語形変遷から導いた助詞「かしら」の本来の意味「自問」と深く関わっている一方、近代以降形成されてきた文末表現に現れる対話ストラテジーの性差の反映であるとも考えられる。これについては、4節で詳しく述べることにする。

*7 堀崎(1995)p.9

3. 現象の観察

本稿では、以下にあげるコーパス中に出現する文末と非文末の「かしら」の用例を観察し、それぞれの特徴を抽出することにより、現代日本語における性差表示の出現位置について考察する。コーパス資料の詳細は以下の通りである。

- ・『CD-毎日新聞 2000 年版』毎日新聞社 2000 年（以下の用例では「毎日」と略す。）
- ・『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』新潮社 1995 年（以下の用例では「新潮」と略す。）
- ・『女性のことば・職場編』自然談話データ（発話者男性 62 人、女性 74 人、不明 18 人、総 154 人）現代日本語研究会 1997 年 ひつじ書房（以下の用例では「自然談話」と略す。）

以上三つのコーパスはそれぞれ新聞、小説、自然談話という異なるジャンルに属す資料である。資料の性格の違い^{*9}により、それぞれの資料における言語現象の傾向に差異が見られる場合があるので、注意して分析を加えなければならないと思うが、三つのジャンルを調査することで書き言葉と話し言葉の両方を含めた現代日本

*8 本稿では、『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』に収録された作品の内、1940 年以降に生まれた日本人作者 7 人の作品を扱った。以下は著作者・作品及び本稿で引用したときの略称である。（赤川次郎『女社長に乾杯！』（女社長）、沢木耕太郎『一瞬の夏』（一瞬）、椎名誠『新橋烏森口青春篇』（新橋）、高野悦子『二十歳の原点』（二十歳）、藤原正彦『若き数学者のアメリカ』（若き）、宮本輝『錦繡』（錦繡）、村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』（世界））

*9 本稿で使用した三つのジャンルの資料は性格が異なっていることは認めなければならない。新聞は音声情報を伴わない、いわゆる書き言葉のテキストである。一方、自然談話は音声情報を伴う、いわゆる話し言葉のテキストである。そして、小説は新聞と自然談話の中間的な性質を有するものと考えられる。読者を想定し、音声ではなく、文字を媒体としているという点では、新聞と同じく書き言葉の性質を有しているが、小説の会話文などの部分はまた自然談話に似ている性質をも持っている。ただし、自然談話ではよく見られる割り込み、繰り返し、重なり、言いよどみなどがほとんど見られない、いわば作者の手を加えた完成度の高い話し言葉である。

語における「かしら」の使用の全体像を大体把握することが可能であると思われる。

3.1. 使用傾向

用例の集計にあたり、川柳などのような韻文関係の使用例は排除した*10。

(7)のような例文は倒置文と判断し、終助詞「かしら」の例として扱った。

(7)もう何回目かしら、1カ月のうち2週間だけわが家の玄関に花を生けるのは…
…。
(毎日・2000年5月7日朝刊98頁)

(8)のような連体修飾的用法の例文は非文末の「かしら」の例とした。

(8)「何かしらの仮説はあるだろう？」
(新潮・世界・僕→若い娘)

以上の手続きを経て、606例を分析の対象とした。606例中、文末の終助詞「かしら」は524例、非文末の「かしら」は82例見られた。資料別の使用詳細は表1である。

表1	毎日	新潮	自然談話	計
文末の「かしら」	262	209	53	524
非文末の「かしら」	44	38	0	82
計	306	247	53	606

*表内の数字は資料別の使用例数である。

ここで特筆すべきなのは、自然談話から得られた53例は、すべて以下の(9)のような文末に用いられる終助詞「かしら」の例であり、非文末の「かしら」の例は1例も見られなかった点である。これは今回扱った自然談話資料特有の性質によるものか、あるいは日常会話のような典型的な話し言葉では、非文末の「かしら」は使

*10 例えば、「万柳の常連どんな顔かしら」(毎日・[仲畑流・万能川柳]2000年1月25日朝刊5頁)、「なぜかしらテレビ広告お詫び見ず」(毎日・[仲畑流・万能川柳]2000年10月28日朝刊5頁)など。

用されにくい特徴をもっているものと考えられる*11。

- (9) 3364, ビーコートで貼ってもいいのかしら、カバーを。
3365, うーん。

(自然談話・大学助手[43歳, 女性]→大学助手[39歳, 女性])

非文末の「かしら」の82例は新聞に44例、小説に38例である。冒頭の(1)以外に、以下の(10)(11)も非文末の「かしら」の例である。

- (10) 春は身の回りに何かかしら変化がある。でも、どこかへんだな、と思うことがあった。
(毎日・2000年5月5日夕刊1頁)
- (11) 私にはこの底の浅いさびしさの、一瞬の痛切さにどこかかしら身覚えがある。
(毎日・2000年2月13日朝刊10頁)

自然談話では終助詞「かしら」の使用例しか見られないが、なぜ、新聞や小説では終助詞の「かしら」の使用例に加え、非文末の「かしら」の使用例も見られるのだろうか。非文末の「かしら」が新聞や小説のような書き言葉資料に出やすいのは、終助詞「かしら」との出現環境の違いの反映であろう*12。即ち、終助詞「かしら」は典型的に話し言葉に現れるが、非文末の「かしら」は必ずしも典型的な話し言葉には現れないのではないかとと思われる。

さらに、文末の「かしら」と非文末の「かしら」それぞれの使用者に注意して見

*11 しかし、日常会話では、「何かかしらの原因があるでしょう。」(作例)などのような用例が使えないわけでもなく、小説の会話文では、上記(8)のような用例も見られる。ただし、いずれも連体修飾の用法である。(10)(11)などのような連用修飾の用法はわずかである。今後、この点についてはより広く自然談話資料を調査する必要があるだろう。

*12 新聞や小説に出た非文末の「かしら」用例を詳しく見てみると、(1)(10)(11)のように、文体的には書き言葉であるが、内容的には、感想を述べたり、内心描写をしたりするものである。一方、客観的に出来事を記述している新聞記事などには非文末の「かしら」の用例が見られなかった。本来の意味「自問」から導いた「不定」は、客観的に事実を述べる典型的な書き言葉の文章には現れにくいのではないかと考えられる。単に文体の違いであるかどうかはこれから考えるべき課題である。

てみると、文末の終助詞「かしら」の場合は、女性 508 例、男性 7 例、不明 9 例である。一方、非文末の「かしら」の場合は、女性 15 例、男性 65 例、不明 2 例である。確かに、終助詞「かしら」は、使用者が女性であることをマークする性差表示の機能を担うが、非文末の「かしら」は特定の性別を連想させるところが見られない結果となる。男女別の使用詳細は表 2 である。

表 2	文末の「かしら」	非文末の「かしら」	計
女性	508	15	523
男性	7	65	72
不明	9	2	11
計	524	82	606

*表内の数字は男女別の使用例数である。

ここで問題となるのは、そもそも同じ一語から発展してきたものが、なぜ、文末の終助詞「かしら」は女性性の強い性差表示となるが、非文末の「かしら」は性差と無関係なのであろうか。以下、文末の「かしら」と非文末の「かしら」の実例に即してそれぞれの使用を解明しながら、性差との関連を見ていく。

3.2. 現象の記述(1)非文末の「かしら」

以下は非文末の「かしら」の例である。

- (12) 「まあ待って下さい。ところであなたはシャフリング処置後、何かしら奇妙な症状に襲われませんでしたかな？たとえば幻聴、幻覚、失神、などといったような？」「ありませんね」と私は言った。

(新潮・世界・博士→ぼく)

- (13) 私はふと、何かしら恐いものを見ている心持になっていました。

(新潮・錦繡・女性の手紙文)

- (14) 未来をつくり担う子供たちと米の消費拡大。この二つの間に、なにかしら縁があるのではないのでしょうか。 (毎日・2000年2月17日朝刊4頁)

- (15) われわれの世代は親族の中に、誰かしら戦争の犠牲者がおりますわ。

(毎日・2000年8月23日夕刊1頁)

- (16) 長時間雨の中を歩くと、どうしてもどこかしら浸水してきて完璧には防水できない。

(毎日・2000年3月2日夕刊7頁)

(17)でも、なぜかしら、わが胃袋は、ほのほの和食が食いたいと叫んでいる。

(毎日・2000年1月4日夕刊3頁)

以上の例から分かるように、非文末の「かしら」は、いずれも「なに」、「だれ」、「どこ」、「なぜ」などのような疑問詞の後につくという使用の制約が見られる。そして、「かしら」は、そのまま疑問詞から離れて文末に移動することはできない。むしろ、「なにかしら」、「だれかしら」、「どこかしら」、「なぜかしら」は一つの複合した形で、「疑問詞+かしら」という構成に見える。

「どこ」は場所、「だれ」は人物、「なに」はその他の名詞を指す。「なぜ」は原因・理由を指す。上記の用例における「なにかしら」、「どこかしら」、「だれかしら」、「なぜかしら」などは、具体的に何か内容的な説明を求めるために使用されているのではない。未確定的なもののその大体を範疇的に予測しながらも、特定はできず、あれかこれかと思いついて迷っている「疑い」を示すものであろう。あるいは、話し手及び書き手は、言語表現化する必要のないものを指すというつもりで使用したのであろう。

「なにかしら」、「だれかしら」、「どこかしら」、「なぜかしら」などは全体で一つのまとまりとなり、一語化し、副詞的な働きをしている。即ち、本来「自問」を表す「かしら」が、疑問詞と結合して一つの複合辞になり、全体として不定を表すという副詞的な性質を持つようになった、と考えるべきではなかろうか^{*13}。

論理的に考えると、(12)～(17)はそれぞれ以下のような意味合いで使われたものと考えられる。

(12) まあ待って下さい。ところであなたはシャプリング処置後、何（か知らないが、ある）奇妙な症状に襲われませんでしたかな？

*13 しかし、「なぜかしら」は「なにかしら」、「だれかしら」、「どこかしら」などと少し異なるように見える。つまり、アクセントにより、一語かどうかは判断できない。それは、もともと原因・理由を表す「なぜ」という疑問詞自身が、「なに」「だれ」「どこ」などの名詞的な疑問詞と違い、副詞的な性質を持つ疑問詞であることから出てきた問題であろう。しかし、(17)の文体と前後の文脈から見ると、「なぜかしら」は一語と判断するのが妥当であろう。また、「なぜ」と似ている「どう」、「どうして」、「なんで」の場合も同じようなアクセントの問題があるが、アクセントおよび文法的性質の問題は今後の課題にする。

- (13) 私はふと、何(か知らないが、ある) 恐しいものを見ている心持になっていました。
- (14) 未来をつくり担う子供たちと米の消費拡大。この二つの間に、なに(か知らないが、ある) 縁があるのではないのでしょうか。
- (15) われわれの世代は親族の中に、誰(か知らないが、誰か) 戦争の犠牲者がおりますわ。
- (16) 長時間雨の中を歩くと、どうしてもどこ(か知らないが、どこかに) 浸水してきて完璧には防水できない。
- (17) でも、なぜ(か知らないが、ある理由で)、わが胃袋は、ほのほの和食が食いたいと叫んでいる。

即ち、「命題の真偽を知らないということの表明」という本来の「自問」的な色彩がまだ残されていると見られる。ただし、「自問」が薄くなり、「不定」の方が強く読み取れる。特に、「だれかしら」、「どこかしら」の場合、「不定指示」の意味合いが強い。

次に、非文末の「かしら」の使用者に目を向けることにする。表 2 の男女別使用例数だけを見てみると、男性による使用の方がより多く見える。(表 2 によると、全 82 例の中に、男性 65 例、女性 15 例、不明 2 例) しかし、これらの用例は、前後の全体の文脈および付加情報などを併せて見ないと、使用者(つまり書き手および話し手)が男性なのか女性なのか、はっきり判断できない。例えば、上記の(16)(17)の使用者は執筆者の情報を見てはじめて、女性であることが分かる。つまり、非文末の「かしら」は使用者の特定の性別を連想させるところが見られない。上記の表 2 のように、男性の使用例が多く見られるのは、新聞および小説という母体の全体量から見ると、男性の書き手および男性の話し手が多いからではないだろうか。したがって、男性の用例数が多く見られても、非文末の「かしら」に使用者が男性であるというニュアンスが加わっているとはいえない。

まとめてみると、非文末の「かしら」には使用の制約が見られる。つまり、その直前の疑問詞と必ず結合し、一つの複合辞になり、本来の「自問」から「不定指示」という副詞的な働きになる。そして、使用者の特定の性別に関するイメージを喚起させない、男性でも女性でも使うことができる表現である。用例だけを読んで、使用者が男性であるか女性であるか判断できず、明確な性差表示にならないといえる。

3.3. 現象の記述(2)文末の終助詞「かしら」

以下文末の終助詞「かしら」について見てみる。

歴史的には、「かしら」は聞き手の存在しない対自的な場面に使用される「自問」を表すものであるから、聞き手の存在を想定しない独話や心内発話のような非対話的な環境で用いられるのが本来の働きである。

しかし、実際の調査結果から分かるように、文末の終助詞「かしら」の使用例はかなり性質の違う二つのタイプに分けられる。一つは、非対話的な環境に用いられるタイプである。このタイプは男性にも女性にも用いられる、性差と関係のないものである。もう一つは、対話的な環境に用いられるタイプである。このタイプは主に女性が用いるものである。いわゆる女性語の代表例としてあげられる終助詞「かしら」は後者のタイプであろう。

それでは、対話に用いられる終助詞「かしら」が、どのような状況で、どのように用いられるかを詳しく検討し、そういった用法では使用者の女性性を指し示す機能があることを見ていく。

以下は対話における終助詞「かしら」の使用例である。

- (18) 「今日の子定は？」「今日が大変よ」「あら、何だったかしら？」「KMチェーンの真鍋社長と夕食」「あ、そうだったわね！」

(新潮・女社長・伸子→純子)

- (19) 「ねえ、人間にも保護色ってあったかしら」「人間にはありません」

(毎日・2000年9月19日夕刊5頁 黒柳徹子→付き人)

- (20) 「……ボクシングをやめて何をしていたのかしら、この四年間」

「水商売をしてたんです。ナイトクラブを一応まかされるような感じで」

(新潮・一瞬・NHK女性ディレクター→内藤ボクサー)

- (21) 「森川さんは時々東京の会社にくるのかしら」ママがカウンターの端から大きな声で聞いた。「あまり来ません」

(新潮・新橋・ママ→ほく)

- (22) 「疲れるってどういうことなのかしら？」と娘が訊ねた。「感情のいろんなセクションが不明確になるんだ。自己に対する憐憫、他者に対する怒り、他者に対する憐憫、自己に対する怒り——そういうものがさ」

(新潮・世界・若い娘→僕)

- (23) 「外国ではよほど苦勞されたのかしら」「何か、古めかしいね。その訊き方は」

(毎日・2000年3月27日夕刊3頁雪絵→深見)

(18)から(23)のいずれの例においても、話し手は問いかけることによって、聞き手から回答を得ようとしている。実際同じ状況で普通の質問文を使うこともできる。

- (18) 「何だったか？」
- (19) 「人間にも保護色ってあったか」
- (20) 「……ボクシングをやめて何をしていたのか」
- (21) 「森川さんは時々東京の会社にくるのか」
- (22) 「疲れるってどういうことなのか？」
- (23) 「外国ではよほど苦勞されたのか」

ただし、「か」より「かしら」による問い方によって、話し手の質問を聞き手に押しつける度合いが明らかに柔らかくなる。自分の疑問を相手に押しつけず、話し手の控えめな態度を表明すると同時に、聞き手に対する配慮からくる丁寧さが加わっている。これは、「かしら」が本来「自問」を表すことから、質問に使われても、聞き手に応答を強制する力が弱いために、派生してくるものであると考える^{*14}。

そして、以下の(24)(25)(26)のように、「かしら」の前に「です・ます」などのような丁寧体をとる例が見られる。

- (24) 「まあ、それじゃすぐにもお隣のお部屋を。……でも、真鍋さんはうちのお得意様でして、よくおみえになるんですが、何かございましたかかしら？」
「ちょっとここで」 (新潮・女社長・女将→警察)
- (25) 「あの、私、何かやりましたかかしら？」
「いや、そうじゃありません。」 (新潮・女社長・純子→伸子)
- (26) 「ああ、そんなことを書いておりましたかかしら」「ええ、何でも、お兄さんのご病気が結核ということになっているけれども、本当は心の病ではないかと思う—というようなことも書かれていました」
(毎日・2000年9月10日朝刊36頁 溝越薫→浅見)

*14 終助詞「かしら」が対話では聞き手に問う場合に用いられる現象については、既に湯澤(1953・1954)、国立国語研究所(1951・1960)、山口(1990)、三宅(2000)などが指摘している。例えば、山口(1990)は、「その自問の表示性の強さから見て、質問表現としての応答の要求性は決して強くない」と述べている (p.91)。

「かしら」の基本的な意味は「自問」であり、聞き手に尋ねるというより自分自身に向かって発話するという側面が強い。一方「です・ます」などの丁寧体は聞き手に対して敬意を示す表現であり、聞き手に向かって発話されるものである。もともと両者は共存しにくいはずであるが、女性の発話例において終助詞「かしら」が丁寧体とともに使用されるのは、ソフトに、間接的に自分の疑問を相手に伝えるためであると思われる。

以上、対話における終助詞「かしら」の使用例を見てきた。対話の用法は「自問」という本来の用法から派生されるものと思われる。本来「自問」を表す終助詞「かしら」は、対話で聞き手に対して用いられることによって、「質問」という機能を獲得するのである。ただし、自分自身が抱えている疑問を聞き手に伝えるにとどめて、聞き手に選択や判断の余地を与える、聞き手に応答の強制をしないという聞き手への配慮、聞き手に対する気遣いを表すという特徴がある。積極的に聞き手に情報を求めようとするのではないソフトな態度を示しているものと思われる。結果として、聞き手から情報をもらえたり、あるいは、相手に自分の気持ちを伝えたりする。対話における終助詞「かしら」はより間接的な、丁寧な表現になり、丁寧さという伝達レベルで機能していることが窺われる。

一般的に、男性の話し方に対して女性の方はより柔らかかで丁寧なことばづかいをするべきだという意識がある。したがって、女性の対話戦略としては、より間接的に、より丁寧な発話の仕方を選ぶことが望まれている。以上の用例から分かるように、文末の終助詞「かしら」は直接的な問いかけを避け、より間接的に自分の疑問を聞き手に知らせ、聞き手の答えを期待するのである。相手に応答を強制しないという配慮から、より間接的な、より丁寧な発話の仕方になる。したがって、終助詞「かしら」には柔らかさや女性らしさというイメージが加わって、「やさしさ・婉曲」というニュアンスを含む女性性の強い性差表示に定着したと考えられる。

そして、女性が「かしら」を使用することによって、その女性性の強い一面を積極的に表出できるようになると同時に、自分自身が、女性性の強いいわゆる社会通念上の「女性」を演じるようになる。「かしら」を使用する女性のステレオタイプが形成され、終助詞「かしら」はステレオタイプ化された、性差化された表現になる。

しかし、実際の対話では男性による終助詞「かしら」の使用例も見られる。これは、終助詞「かしら」を使用することによって、率直な問い方から出てくる押し付

けがましさを避けて、女性性の強い表現形式に含まれている「やさしさ・婉曲」というニュアンスを利用する対話ストラテジーによるものと思われる。

4. 性差の形成と性差表示の出現位置—「かしら」の現象をめぐって

以上の現象観察から分かるように、本来一語から出発してきて、ともに「自問」を表す文末の終助詞「かしら」と非文末の「かしら」であるが、前者は「自問」の用法から「婉曲・丁寧さの加わる質問」という用法に派生し、女性性の強い性差メーカーとして機能しており、一方、後者は疑問詞と一語化して「不定指示」の意味機能をし、明確な性差表示になっていない。ただし、文法的な性質の異なりにより、それぞれ自然に性差表示と関わるあるいは関わらない、と単純に言うことができない。そこで、現代日本語における性差表示は、一体言語のどの部分に現れやすいか、どの部分に現れにくいのか、という問題が立てられる。即ち、性差表示機能を担うのは日本語のどの部分であるか。何らかの見えないメカニズムが日本語の中にプログラムされているのではないとも考えられる。また、さらに追究すると、いつごろから、こういう現れ方が形成されたのか、などが疑問となる。

この言語現象に解釈を加える前に、まず、日本語文の構造的特徴と性差表示の出現位置との関連を考えてみる。実際、日本語の文には、性差表示と深く関わりのあるものもあるし、逆に性差表示と直接に関わりがないものもある。この点を考慮に入れておく必要があると思われる。

そもそも言語における性差は、言語表現主体の姿勢や在り方が強く意識される状況で形成されたものであると思われる。つまり、相手に自分の態度を表すとき、言語表現主体の女性あるいは男性が自らの性別を特に意識したりあるいは意識させたりするために、意図的に言語使用に反映させることにより、言語表現形式の性差を引き起こしたのである。こうした言語表現における性差は音声・文法・語彙・表現・文体・表記などの各面に現れる可能性があるが、その出方は必ずしも均等ではない。現代日本語における性差を論じる際、人称代名詞と文末表現（主に終助詞を指す）が性差の最も顕著に現れるものとして中心的に取り上げられることが多かった。

同じく性差表示機能を担う人称代名詞と文末表現は、また異なるシステムであることに留意しなければならない。人称代名詞は特定の性が使用したり、あるいは特定の性に対して使用したりするというような性差表示の側面が見られる。一方、文末表現としての終助詞は、従来文の末尾について、文の表す命題に対する話し手

の判断・疑念・同意・感嘆、話し手が聞き手に対して行う伝達・確認・禁止などのモダリティー情報を表すものとして捉えられてきた^{*15}。文末表現における性差は人称代名詞に比べると、対話ストラテジーによって左右される面がより一層強く見られる。つまり、文末表現は本来の固有の意味・用法を持っている上に、対話ストラテジーとして、性差による差違が加えられるのである。

しかし、日本語の文末表現における性差が現在のようになったのは明治 30 年代以降、遅くとも明治の末期になってからである^{*16}。明治 30 年代になると、言語形式の上では今日と同じような女性性・男性性の強い性差表現がかなり多く現れる。女性・男性に対するジェンダー規範、女性・男性の対話ストラテジーおよび女性・男性のステレオタイプがかなり現代に近づいているといえる。

文末の「てよ」、「だわ」、「のよ」などに代表される女性性の強い言語形式と同時に、終助詞「かしら」が女性性の強い言語形式として定着してきた。そういう意味で、終助詞「かしら」における男女差の形成は、明治以降形成された文末表現における性差の一環である^{*17}。

従来の性差研究は、主として明確な性差表示の用いられる部分を分析の対象としてきた。つまり、使用者が女性であるか、男性であるか、ということを積極的にマークする形式に注目したのである。そして、これらの研究対象をいわゆる女性語・男性語というカテゴリーに分けて、言語上の性差の記述と分析が行なわれてきた。

*15 益岡・田窪 (1989) p.48

*16 石川(1972)、小松(1988)、鈴木(1998)、寺田(2000・2001)、任(2005)などの諸研究による。

*17 任(2003)では、明治 30 年代前後の終助詞「かしら」の使用を考察した。男性の「かしら」も女性の「かしら」も話し手の「自問」を示すが、女性の場合、実質的には、聞き手の反応を求めたりしている場合が多い。直接的な問いかけを避け、間接的に自分の疑問を知らせ、聞き手の答えを期待するとしている。女性に求められる、より丁寧な発話の仕方によさわしいことから、近代から現代にかけて「かしら」を使用する女性のステレオタイプが形成され、「かしら」が「やさしさ・婉曲」というニュアンスを含む女性性の強い性差表示に定着した。終助詞「かしら」における性差の形成は明治以降形成された対話ストラテジーにおける性差の反映である、としている (p.83)。

しかし、より総合的に性差の問題を考えるには、「女性性・男性性」*18を示すための性差表示が用いられる箇所はもちろんのこと、用いられない箇所についても分析を試みることも重要な作業である。性差表示の現れる箇所のみを分析対象とした研究では、その抽象化・一般化に限界があるからである。「女性性・男性性」を積極的にマークしない言語形式にも注目しつつ、性差表示以外の言語現象に見いだされる特徴を解明することも、現代日本語における性差表現の全体像を研究するのに欠かせない、重要な一環であると考えられる。そういう意味で、助詞「かしら」の現象は非常に面白い事例である。

文中の位置・機能により性差表示に違いが出るというこの言語現象には日本語の根本的なメカニズムが潜んでいると考えられる。即ち、日本語における性差表示の機能を最も顕著に担うのは文末表現であり、非文末表現は必ずしも性差表示の機能を担わない、という一般的な性質の現れであると考えられる。

ただし、非文末のどういう位置、どういう文法形式として、言語表現主体側のジェンダー意識が表れたのか、他の現象を含めて、一つ一つのケースの検討はこれからの課題であろう。

言語における性差は時代の変化とともに変わっていく。永久不変の規範性をもつということはない。ジェンダー意識がことばのどこに、どういう文法形式で表れるかは、時代によって異なる。現代日本語の性差を論じる際、人称代名詞と終助詞が中心的に取り上げられるが、これらはそもそも近代以降形成された性差の現れである。古代の日本語にはこのような語彙的な使い分けは目立たないし*19、これからの日本語も変化しつつあり、ジェンダー規範及びジェンダー意識がまた別のところに現れるかもしれない。したがって、これからの性差研究には、本稿で論じたように、ジェンダー意識とそれを表出する言語形式(性差表示)の関係という視点が必要であると思われる。

*18 「女性性・男性性」とは、言語における性差を、従来の二項対立的視点と異なり、性差表出の多様性という言語使用事実に基づいて女性性・男性性の表出の度合いの差で捉える概念である。詳しくは任(2005)を参照されたい。

*19 坪井(2003)によると、平安時代における言語上の性差は現代日本語のような男女の語彙上の差異が見あたらない。男性の領分たる<漢詩文・漢語・漢字>の世界を表向き侵犯しないことが、女性の言語使用上のジェンダー規範の最大のものであるという(p.19-20)。

5. おわりに

本稿はコーパス言語資料を用い、文末の終助詞「かしら」と非文末に用いられる「かしら」の実例を考察し、現代日本語における性差の出現位置という問題を検討した。文末に用いられる終助詞「かしら」は、その使用者が女性であることを積極的にマークする、女性性の強い性差表示である。これに対して、非文末の「かしら」は不定指示という副詞的な働きをし、性差との関連が薄く、性差表示にならない。

こういったケースはそれ一つで見ると偶然である可能性を否定しきれないし、他の性差表示すべてにあてはまるかどうか疑問であるが、一つ一つのケースの積み重ね、それぞれの整合性を考えていくことを通して、現代日本語における性差の出現位置を検討する上でも、一つのアプローチの仕方を提起することになるのではないかと考えている。

また、対人的機能を重視する待遇表現では、相手に対する待遇意識や態度を表明する待遇表示は文末表現において最も顕著に担われる。文中の切れ目に、こうした話者の対相手意識や態度のことば（待遇表示）が現れるとは必ずしも言い切れない。そういう意味で現代日本語における性差表示と待遇表示には、類似する点が多く見られる。今後、両者の関連について解明しなければならないと思われる。

参考文献：

- 石川禎紀(1972)「近代女性語の語尾—「てよ・だわ・のよ」—」『解釈』18巻9月号
解釈学会
- 井出祥子(1983)「女らしさの言語学—なぜ女は女性語を使うのか」『話しことばの表現
講座日本語表現3』筑摩書房
- 井出祥子・櫻井千佳子(1997)「視点とモダリティの言語行動」田窪行則編『視点と言
語行動』くろしお出版
- 遠藤織枝・尾崎喜光(1998)「女性のことばの変遷—文末・コト・テヨ・ダワを中心
—」『日本語学』17巻6号 明治書院
- 奥津敬一郎(1996)『拾遺日本文法論』ひつじ書房
- 尾上圭介(1983)「不定語の語性と用法」渡辺 実編『副用語の研究』明治書院
- 尾崎喜光(1997)「女性専用の文末形式のいま」『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 片桐恭弘(1995)「終助詞による対話調整」『言語』24-11 大修館書店
- カノックワン・ラオハブラナキット (1996)「「カナ」「カシラ」に関する考察」『日本
語と日本文学』23号 筑波大学国語国文学会

- Kawasaki Kyoko and Kirsty McDougall (2003) Implications of Representations of Casual Conversation: A Case Study in Gender-associated Sentence Final Particles
『日本語教育論集 世界の日本語教育』13号 国際交流基金日本語国際センター
- 川森雅仁(1991)「終助詞と認知様相」『自然言語処理研究報告』84 情報処理学会
- 金水 敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 現代日本語研究会編(1997)『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 国立国語研究所報告3(1951)『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』秀英出版
- 国立国語研究所報告 18(1960)『話しことばの文型(1)―対話資料による研究―』秀英出版
- 後藤 斉(1996)「コーパスとしての新聞記事テキストデータ―終助詞「かしら」をめぐって」『東北大学言語学論集』5 東北大学言語学研究会
- 小林千草(2001)「女性のことば今昔―「ちげーよ」と「よくってよ」」『国文学 解釈と教材の研究』46巻12号 學燈社
- 小松寿雄(1988)「東京語における男女差の形成―終助詞を中心として―」『国語と国文学』65巻11号 東京大学国語国文学会
- 阪倉篤義(1975)「文法史について―疑問表現の変遷を一例として―」『文章と表現』角川書店
- 阪倉篤義(1993)『日本語表現の流れ』岩波書店
- 佐々木峻(1993)「大蔵流狂言詞章の文末表現法―「……か知らぬ。」「ちゃ知らぬ。」等の言い方について―」山内洋一郎、永尾章曹編『近代語の成立と展開』和泉書院
- ザトラウスキー・ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察―』くろしお出版
- 鈴木 睦(1989)「いわゆる女性語における女性像」『近代』神戸大学近代発行会
- 鈴木 睦(1997)「女性語の本質―丁寧さ、発話行為の視点から―」『女性語の世界』明治書院
- 鈴木英夫(1988)「終助詞についての構文論的研究―問いかけと省略を中心にして―」『国語と国文学』65巻3号 東京大学国語国文学会
- 鈴木英夫(1998)「現代日本語における女性の文末詞」佐々木俊、藤原与一編『日本語文末詞の歴史的研究』三弥井書店
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 坪井美樹(2003)「男手・女手―性差による表現様式の分類―」『筑波日本語研究』8号

筑波大学日本語学研究室

- 寺田智美(2000)「明治末期の女性語について—夏目漱石の小説にみえる「絶対女性語」の考察—」『紀要(早稲田大学日本語研究教育センター)』13
- 寺田智美(2001)「明治末期の男性語について—夏目漱石の小説にみえる「絶対男性語」の考察—」『紀要(早稲田大学日本語研究教育センター)』14
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 富樫純一(2004)「終助詞・間投助詞の「さ」に関する覚え書き」第74回関東日本語談話会発表レジュメ 2004年5月8日於学習院女子大学
- 時枝誠記(1941)『国語学原論』岩波書店
- 中右 実(1979)「モダリティと命題」『英語と日本語と』くろしお出版
- 中村純子(2000)「終助詞における男性語と女性語」『信州大学留学生センター紀要』1号 信州大学留学生センター
- 中村桃子(2001)『ことばとジェンダー』勁草書房
- 中村桃子(2004)「『女ことば』の成立と国民化—ジェンダーから見えてくる新しい日本語のすがた—」『日本語学』23巻6号 明治書院
- 仁田義雄(1989)「現代日本語のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 任 利(2003)「終助詞「かしら」における男女差の形成—近代小説における用例調査を中心に—」『筑波日本語研究』8号 筑波大学日本語学研究室
- 任 利(2005)「明治30年代の小説における性差と文末表現」『日本語と日本文学』40号 筑波大学国語国文学会
- 野田春美(2002)「終助詞の機能」『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 福島悦子(1993)「終助詞の機能—話者の性提示という観点から—」『東北大学留学センター紀要』1号 東北大学留学生センター
- 堀崎葉子(1995)「江戸語の疑問表現体系について—終助詞カシラの原型を含む疑い表現を中心に—」『青山語文』25号 青山学院大学日本文学会
- McGloin, N. (1991) "Sex Difference and Sentence-Final Particles" In S. Ide and N. McGloin (eds) *Aspects of Japanese Women's Language*. Kuroshio Publishers
- マグローイン・花岡直美(1993)「終助詞」『日本語学』12巻6号 明治書院
- 益岡隆志・田窪行則(1989)『基礎日本語文法』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 又平恵美子(2000)「明治・大正期の文末表現—終助詞「わよ」—」『筑波日本語研究』5号 筑波大学日本語学研究室

- 南 不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 三宅知広(2000)「疑問表明の表現について—カナ・カシラを中心に—」『鶴見大学紀要』
37号第I部国語・国文学編 鶴見大学
- 村上昭子(1981)「終助詞「かしら」の語史」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修
館書店
- 森田良行(1991)「語彙現象をめぐる男女差」『国文学解釈と鑑賞』56巻7号 至文堂
- 森山卓郎(1997)「「独り言」をめくって—思考の言語と伝達の言語—」川端善明・仁田
義雄編『日本語文法体系と方法』 ひつじ書房
- 矢島正浩(1996)「疑問表現+しらぬ」の表現—近世前・中期の狂言台本を資料として
—」『国語学研究』35号 東北大学文学部
- 山口堯二(1990)『日本語疑問表現通史』明治書院
- 山口佳也(1992)「文節末の「か」の用法」『日本語史の諸問題：辻村敏樹教授古稀記念』
明治書院
- 湯澤幸吉郎(1953)『口語法精説』明治書院
- 湯澤幸吉郎(1954)『江戸言葉の研究』明治書院
- 李 徳霞(2003)「若い世代の話し言葉における日本語の性差について—終助詞と人称
代名詞を中心に—」『社会環境研究』8号 金沢大学社会環境科学研究科
- 渡辺 実(1968)「終助詞の文法論的位置—叙述と陳述再説—」『国語学』72号国語学会
- 渡辺 実(1971)『国語構文論』塙書房

辞書類及び文献資料：

- 『明鏡国語辞典』北原保雄編 大修館書店 2002年／『日本国語大辞典』(第二版)小
学館 2002年／『日本語文法大辞典』明治書院 2001年／『大辞林』(第二版)松村
明編 三省堂 1995年／『日本語教育事典』大修館書店 1982年／『江戸語大辞典』
前田勇編 講談社 1974年／『日本文法大辞典』明治書院 1971年／『日本文法講座6
日本文法辞典』明治書院 1958年／『大蔵虎明本狂言集の研究』上・中・下巻 池田
廣司・北原保雄校注 表現社 1972年、1973年、1983年／『新日本古典文学大系 86
浮世風呂 戯場粋言幕の外 大千世界楽屋探』神保五彌校注 岩波書店 1989年／
『洒落本大成』中央公論社 1979年／『滑稽本集』日本名著全集刊行会 1927年

ニシ リ／人文社会科学研究所
(2005年8月1日 受理)